

気付けば僕には年上の
彼女がいた

unin

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

身長、顔立ち、仕草、声：どこをとつてもショタと言われる少年、高部真冬は高校入
学と同時にマンションに一人暮らしを始めた。真冬の家のお隣には告白したことさ
れたことも全く覚えのない美女、丸山彩が住んでいた。

これは真冬の怒涛の日常を綴った小説である

目次

じです

——

気づけば僕には生きる希望を持つてた感

いつもこんな感じです

金曜日は嬉しい感じです

思い出せない感じです

彩さんは休ませたい感じです |

夏休みに突入した感じです

夏祭りを満喫したい感じです

記憶のヒントを集める感じです
（上）

記意の二二ナキ集めの處(ア)です

再び思ひのおり遊ぶ感想二十

卷之三

真実を知る感じです

101 81

70

61

41

34

25

1

1

いつもこんな感じです

「はあ……緊張する…。何度も部屋には行つてゐるのに何でだろ…」

東京都内のあるマンションに住むこの少年こそ主人公の高部真冬（たかべまふゆ）である。

何でもネガティブに考える真冬は今まさに「ここで変なことしてるって思われたらどうしよ：」と、思つてゐる最中。インターホンに震えながらも手を伸ばした瞬間勢いよくドアが開いた。

「待つてたよ真冬くーん！」

「いだつ！」

「あつ、ごめん！」

ピンク髪がトレードマークのこの部屋の家主、丸山彩が肝を冷やして真冬を出迎えた。

「大丈夫!?」

「えへへ。大丈夫ですよ。速く中に入りたいです。」

「そうだね。じゃあどうぞ!」

「お邪魔します。」

「真冬君！ここ座つて！」

「はい…って、彩さんのお膝ですか!?」

「だつて真冬君軽いから私大丈夫だよ?」

「いやあ…そういう問題じやなくて…」

「え…？ 座つてくれないの…？」

「わ、分かりました！ 座りますから！」

「そこなくちゃ！ おいで！」
彩の涙目攻撃にはめつぽう弱い。それは真冬が彩と出会った当初から変わつていな
い。

「そこなくちゃ！ おいで！」

「失礼します…。（彩さんの部屋着が…その…）」

ぱふつ

（やつぱり柔らかくてあつたかい…）

座つた瞬間真冬の体は彩と密着。彩の腕が真冬の首を優しく包み込み真冬はリラックスできるはずもなく緊張が増す。その理由に彩の服装が薄いシャツにドルフインパンツという軽装であることも加えられる。

「なあに緊張してるの？」

「し、してないですよ。」

「ほんとかなあ？ 私には心臓の音が聞こえるんだけどな？」

（バレてる！？）

「そ、そういう彩さんこそどうなんですか？」

「私？ 私はね：緊張してないよ。だって真冬君より年上なんだからね！」

「嘘。さつきから彩さんの胸が僕の頭に当たつてそこから心臓の音が聞こえてますよ。」

「えっ、ウソ！ もう！」

(えへへ、彩さんに一泡吹かせた！)

「真冬君のえつち。」

「！」

その一言で真冬の心臓がどれ程引き締まつたか、想像に容易い。

「ねえ真冬君。もう私達付き合つてるんだから、そろそろさんづけとか敬語とかやめてほしいな。」

「だつて…彩さん僕よりも年上なんですよ？それに…」

「それに？」

「ううん、何でもないです。とにかく、僕はこれからも敬意を払いますから！」

「そつか。残念だなあ～。でもいいもん！」

(やつぱり彩さん可愛い…)

「じゃあさ！ その…もつと親愛を深めるために…その…／＼

「？」

「わ、私のお尻に…クリームぬつてくれない…／＼」

(えええええ!? 彩さんのお尻触るの!?)

「や、やります…（もおーーーー!! 何言つてるの僕のバカバカバカ!）」

ドルフインパンツの裾から見るからに柔らかそうな尻がはみ出ている。そして真冬は意を決して触る。

「あんっ！／＼」

「ごめんなさい！いきなり触つてびっくりしましたよね…」

「いいの／＼…そのままやつてほしいな。」

「は、はい…／＼」

「んんんっ、はあん！／＼」

（頼む！僕の理性持つてくれ！…彩さんのお尻柔らかいなあ…何言つてるんだ僕は

！）

三分後…

「彩さん…終わりましたよ…／＼」

「うん、ありがと！気持ち良かつたよ！」

「そ、そうですか…」

「触つてて気持ち良かつた…？／＼／＼

「えっ!? 何言ってるんですか…」

「どうなの？ 正直な気持ちで…」

「気持ち良かつたです…／＼

「え？ 聞こえないなあ…」

「もう……彩さんのいじわる…／＼

「（可愛いなあもおお） 真冬君のためにお尻、頑張つて鍛えたの。」

「そうなんですね…（やっぱり彩さんつて頑張りやさんで可愛いくて…僕にはもつたないくらいだね。）

「なんか真冬君…眠そうだね。」

「え…？ そんなことないですよ…。」

「太もも、かしてあげる！」

「じゃ、じゃあ遠慮なく…（やっぱり太もも柔らかい。）」

「ナデナデ。」

「ああっ。ダメえ…………スヤスヤ」

「もう寝ちゃつた。真冬君は可愛いいなあ……」

「このままあの事を完全に忘れてほしいな。」

金曜日は嬉しい感じです

前述した通りこのマンションでは真冬の家の隣が彩の家だ。早朝6時、カーテンが太陽光を遮る部屋で彩は眠気を吹き飛ばして壁に耳をくっつけていた。

「今日は…大丈夫かな…。」

「ふああ…よく寝たあ。」

「ホツ、大丈夫みたいだね…」

何かに安堵して胸を撫で下ろす彩。ひとまず今日は安心だがこの行為は毎朝繰り返されている。当然真冬はこの彩による行為のことを全く知らない。”知られてはならない”彩が真冬と出会った当初からそう決心したのだから。

「それにしても真冬君、今日も声が可愛い…」

ピンポンと真冬の家のチャイムが鳴る。朝7時、太陽光が差し込む家中から真冬

はチャイムに対し元気に応答した。

「はーい！」

「おはよ真冬君！」

「彩さん！おはようございます！」

「忘れ物とか大丈夫？」

「はい、大丈夫ですよ。行きましょう！」

5分後…

「手、出してほしいな。」

「えっ!? 僕の学校の方が先だから…皆に手をつなぐの見られちゃいますよ!?」
「別に私は手をつなぐなんて一言も言つてないよ!」

「あつ……」

「もう、真冬君、私と手をつなぎたいの?」

「そういう彩さんだつて！僕と手をつなぎたいんじゃないですか?」

「ぐつ！それは…」

10 金曜日は嬉しい感じです

「僕も…彩さんと手をつなぎたいです。」

「えつ、いいの!?」

「皆に見られちゃうのは恥ずかしいですけど…それでも彩さんと手をつなぎたいっていう思いの方が強いんです。」

「こんなに朝早いんだから皆学校に来てないよ。」

「確かに…」

「じゃあ手、つなごうか！」

「はい！」

学校があるという朝特有の氣だるさはこの二人にはないらしい。むしろ互いとふれあう絶好の機会なのだ。

「じゃあここで一旦お別れですね…」

「うう、寂しいよお…でも学校が終わつたらまた会えるよね！」

「そうですね。僕も頑張りますよ！」

「じゃあね、ばいばい！」

「また後で！」

(張り切つちやう真冬君、いつ見ても可愛いなあ…)

三分後、真冬の通う高校にて：

「よお真冬！」

「大胡君！びっくりさせないでよ…ずっとそこに隠れてたの？」

「おうそまさ！真冬の年上彼女を一目見ておきたくてな：そしたらなんだよ！背が高く
ておつとりしてて…お似合いじゃねえか！」

「そ、それはどうも……」

「ま、俺は応援してる。結婚式には呼んでくれよ？」

「そんな先のことまで…」

「あ、中間テストの範囲が出たつてよ。今回も学年トップ狙うのか？」

「うん。大胡君には負けないよ！」

「模試の恨み、晴らさせて貰うからなー！」

「あはは…」

金曜日：明日が休みという優越感が学生を襲う。それは高校生に限らず大学生も同

様でありこれはほんの一例である。

夕日が沈む午後5時の校舎で自習を終えた真冬に電話が入った。

「もしもし彩さん？どうしたんですか？」

「真冬君、今どこにいる？」

「学校で自習してましたけど…」

「やつぱり真冬君は頑張りやさんだね…すごく偉いと思うよ！」

「あはは…ありがとうございます…。それで、どうしたんですか？」

「真冬君、明日つて学校おやすみだよね。」

「そうですけど…」

「良かつたら…あの…」

「？」

「今夜、私の部屋に泊まつてく？／＼

「？」

急に真冬の心臓が締め付けられる。高校生という自由さが広がった時期で初めて人の家に泊まることを経験する。何が起きるか分からぬのが真冬をなんとも言えない

気持ちにさせる。

「いいんですか…？／＼

「えへ、また緊張してるんだね。」

「だって…初めてですかから…」

「私も、人を泊めさせるのは初めてだよ。」

「そつ、そうですか…」

「じゃあ私、家で待ってるからね。いつでも来ていいよ。じゃあね！」

「あっ、ちょっと彩さん！……電話切っちゃった。もう、強引な人だなあ…」

一人しかいない教室で呟く真冬だった。

そしてその日の夜。真冬は結局彩の家に泊まることにした。晩御飯も済ませ、もう後は寝るだけである。

「ふああ…」

「真冬君もう寝る？」

「そうですね…もう寝ます。どこで寝ればいいですか？」

「私のベッドで一緒に寝よっか。」

「!? 彩さんと…いいいいいい一緒に!?」

「もう今日何回驚いてるの？私達恋人だよ？それくらいいいでしょ？それとも…ダメな
の…？」

「わ、分かりました！一緒に寝ます！」

「ほんと!？やつたー!!」

(表情がコロコロ変わる：そんな彩さんも素敵だな…)

外は車のエンジン音も話し声も静まり今日一日が終わったことを感じさせる。それはこの寝室も例外ではない。

「ほーら、おいで。」

「し、失礼します…（緊張して寝れない気がする…）」

「そんな固くならなくていいんだよ？リラックスリラックス。」

彩が真冬の顔を胸いっぱいに優しく抱き止めた。その包容力は真冬の緊張を一気に

ほぐしてついには…

「スヤスヤ…」

「寝ちゃつた。やつぱり寝顔が可愛いんだけど…写真撮つたら真冬君、起きちゃうよね。」

互いにリラックスできるこの関係になれて心底嬉しい彩に一本の電話が入った。真冬を起こさないように、彩は一度ベランダに出る。

「はいもしもしお世話になります……はい……はい。えーっと多分真冬君は完全に忘れていると思います。ここ最近も笑顔で……はい。こちらこそよろしくお願ひします。」

電話を切つてまた真冬がいるベッドに入る。彩は真冬を抱き止めながら何かをまた決心し直した。

思い出せない感じです

夜10時。真冬は小学校のアルバムを見返しながら必死に何かを思い出そうとしていた。別に感傷に浸つている訳ではないのだ。

「うーん、やつぱり思い出せないなあ。ここに僕が友達と仲良く遊んでいる写真があるけど全く覚えがない。」

そう彼は…………失った記憶を取り戻している最中なのだ

本人には分からぬが何故か中学以前の記憶が全てなくなっている。まるでブツリと切れた線路のように。真冬はこうしてたまに過去の写真を見ては思い出そうと戦っているのだ。

（やつぱり……写真を見るだけじゃダメなのかな。もつと他の方法を考えないとダメそうだね……。）

そう思いつつ、真冬は明日に備えてベッドの中で意識を落とした。

一方、時を同じくして暗い寝室で真冬のことを気にかけている女性が一人いた。……

真冬の彼女、彩だつた。

(お願い真冬君。思い出そうとなんてしないで。きっとそうなつたら…多分真冬君には耐えられないだろうから。)

次の日、真冬は放課後になつて相変わらず同級生に絡まれていた。

「よお真冬。なんか今日の授業全体的にだるくなかったか?」

「そ、うかな?僕はいつも通りに感じたけど。」

「さつすが真冬。中学時代全国模試上位にいた人はレベルが違うってか。ハツハツハ

!」

「そんな大袈裟だよ……」

「でもな真冬。この学年にも真冬を打ち倒すべく必死に勉強してる奴らがいるからな。命取られないよう気を付けろよ?」

「う、うん……(やつぱり:都内の進学校つて競争が凄まじいのかな。)」

18 思い出せない感じです

「あ、それと校門に誰かいるんだけど…ピンク髪の女性が。」

「ピンク髪の…？って、彩さん!?」

「なあ～んだ。真冬の彼女さんかよ。お前のこと待ってるんじやねえか？」

「そう…かもね。」

いつもなら彩は待つていてる時、真冬に電話を一本入れるのだが今日はしなかつたのだ。神経質な真冬にとつてはそれが不安の種になつた。

(おかしいな……何かあつたのかな?)

校門前にて

「待つてたよ真冬君！」

「あ、彩さん……今日は何か急ぎの用が合つたんですか？」

「え？ 特にないよ……？」

「電話、入つていませんよ。忘れちゃつたんですか？」

「あっ!! 忘れちゃつた……もおお。私、昔からドジつ子つて言われちゃうんだよね。大

切な場面でよく囁むし、段差で転げるし、もうなんか…………」ブツブツ
「わあーーっ！彩さんネガティブにならないで！僕がフォローするから！」

「…………本当に？」グスツ

「本当です！」

「やつたあー！真冬君、だーい好き！」

「えつ、ちよつと彩さん！ここ僕の学校の前ですよ！（彩さんの胸気持ち良い……）」

「あつ、ごめんね……でも可愛いからしちゃうもん！」

「（そういう彩さんの方が可愛いよ……。）それで、今日は何の用ですか？」

「そうだった……じつ、実はその……」

「？」

「特に用が無いんだよね。」

「えつ、無いんですか？」

「なんか真冬君に会いたくなっちゃって……。ダメかな？」

「いえいえ！そんなこと無いですよ！僕も……毎日彩さんと会えて嬉しい……。」

「本当!?明日学校おやすみでしょ?だつたらデートしょ!」

「ちょ、ちょっと彩さん！腕千切れちゃう！」

真冬の手を握つて走る彩。そんな初々しいカップルのやり取りを見てた真冬のマブダチ、大胡はいてもたつてもいられなかつた。

「はああ…いいなあ真冬。この学校でもトップで美人な彼女もいるなんてよお…クソオオオオオオ！俺も彼女ほしいいいいい！」

しかしその雄叫びは誰の心も打たなかつた。

駅前のパンケーキ屋にて

「わああ！真冬君、美味しそうだよ！」

「そうですね：早く食べたいです！」

「でもその前に写真、撮ろうよ！今日は付き合つて1ヶ月記念だよ！」

「早いですね：」

「じゃ、撮るよ」パシヤ

「あ、凄くいい写真ですね。snsにアップするんですか？」

「ううん。これは二人だけの秘密だよ？」

「二人だけの…」

「なあに真冬君。ニヤニヤしちゃつて！」

「し、してないですよ！」

「本当かな～？」

「速く食べましようよ！」

「急に話題をそらしたね：じゃ、いつただきまーす！ハムハム美味しい！」
「モグモグおいひい～！」

「（可愛いなあ…） 真冬君、ほつぺにクリームついてるよ？」

「あ、本当だ。」

「待つて、とつてあげるね。」

「ひやん！／＼

「えへへ…真冬君のほつぺ、ブニブニ～！」

「彩さん…彩さんのほつぺにもクリーム、ついてますよ？」

「あつ」

「（そんなところも可愛い…） よいしょ。」

「とつてくれたんだ…ありがと！」

「（彩さんのほつぺブニブニ…） そうだ、聞きたいことがあつたんです。」

「どうしたの？」

「今日は付き合つて1ヶ月記念でしたけど…僕達もつと付き合つているんですよね？」
「そ、そうだね…」

「改めて聞きます…記憶をなくす前の僕つてどんな感じでした？」
「うーん、そうだね。今の真冬君と変わらないね。優しくて、可愛いくて。今も昔も私の自慢の彼氏だよ！」

「そうですか…えへへ。ありがとうございます。」

「病院で会つてからもう1ヶ月経つたんだね。その日を私達の付き合つた日にしたんだよね。」

「そうですね。失礼ですけど…僕達、何年付き合つていきました？」

「二年付き合つてたよ。私が高校二年生の時に偶然町で真冬君に助けられて…一目惚れしちやつたんだ。」

「そうだったんですね。…ごめんなさい。そのときの事、まだ思い出せなくて。」

「無理に思い出そうとしなくて良いよ。それに、私が記憶を失つた分まで真冬君を”楽しい”で埋め尽くしてあげるから！」

「ありがとうございます！彩さんといると頼もしいです！」

「こつちまで嬉しくなつちゃうな。ありがとう、真冬君！」

「あ、また話変えちゃいますけど…」

「？」

「記憶を失う前の僕が彩さんと一緒にいる写真、ありませんか？」

「そ、それね……私、謝らないといけないことがあってね。」

「なんですか？」

「私、前に交通事故にあってね、そのときに写真のデータが飛んじやつたみたいなの。」「ええっ!? そうなんですか!!?」

「だから、ごめん！ 真冬君の貴重な手掛けかりがなくて……」

「そんな……でもさつき彩さんが言つてたじやないですか。」

「なんのこと？」

「無くなつた分まで”楽しい”で埋めちゃえばいいって。」「！」

「これからもよろしくお願ひします！ 彩さん！」

「う、うん！ よろしくね！ 真冬君！」

「さ、パンケーキ食べましようよ。」

「……そうだね。」

24 思い出せない感じです

彩は歯切れ悪く返答した。今あるパンケーキは彩にとつては甘すぎるのだろうか。

彩さんは休ませたい感じです

最高峰の進学校の運命なのだが、授業のペースが以上に速い。そのため家での予習が欠かせなくなるわけだ。何が言いたいかと言うと真冬は休みだからと言つて気が抜けないわけだ。

土曜日、午後1時という眠気が襲つてくる時間ですら真冬は自分を追い込む。

「はああ…休憩したい……。でもやらなきゃ……」

ピンポン

「あれ？ 誰だろ……。」

扉を開けた先には

「真冬くーん！ 真冬くんの彩ちやんだよ！」

軽装でショートパンツの彩が満面の笑みで真冬を訪ねた。

「彩さん!? ど、どうしたんですか……?」

「真冬くんに会いたくなつちやつたの……ダメかな……?」

「ぼ、僕は大丈夫ですか! 涙目にならないでほしいなあ……」

「ホント!? ありがとく! ギュー!」

「エへへ (*、▽、) ヾギュー。」

真冬の体が彩の体にすっぽりと収まる。こういうやり取りの有益さはやつて いる本
人達にしか分からない。言葉で言い表せないが絶対必要な行為に他ならない。

リビングの小さいソファーアに座つて交流スタート。

「それで彩さん、今日も僕に会いたかつたんですか?」
「それもあるんだけど…今日はね、」

「?」

「真冬くんをリラックスさせに来ました!」
「僕を…リラックス? どういうことですか?」

全く話が見えてこずにポカンとした真冬に彩は返答する。

「だつて真冬くん、最近すごく疲れているのが顔に出てるんだよね。きっと勉強で自分を追い込んでるんでしょ。ほつペツンツン！」

「ちよつ……くすぐつたいですよ……それで、そんなに顔に出ていたんですか？」

「うん。勉強で追い込んでいますって顔に書いてあつたよ。真冬くん、自分に厳し過ぎるところあるからね～。」

「そんなに見え見えだつたんだ…」

「自分に厳しすぎるのもあまり良くないことだよ。だから今日はお姉さんが真冬くんを甘やかしに来たよ！ いーっぱい甘えてね！」

「彩さんに……甘える？」

「緊張しそぎだよ？ リラックスしなくちゃ。じゃあまずは私の膝の上にのつて！」

「はい……失礼します……」

「じゃあ肩揉んであげるね。」

「お願ひします…」

「わっ！ すごく肩こつてるね。」

「そんなに驚きますか？」

「うん。この固さはなかなか手強いね。長時間勉強してたのが目に見えて分かるよ。」「気付いたら凄い時間が経つていたってこと、結構あるんですねよね……。」

「どれくらいやつてるの？」

「15時間くらい……。」

「そんなにやつてるの!? 確かに肩がこるのも分かるよ……。じゃあ、もつと力入れなきや！」

「彩さんこそ、あんまり無理しないでくださいね。」

「真冬くんは優しいね。でも大丈夫！ このままほぐしていくよ～！」

3分後……

「ふにゃあ……気持ちいい……。」

「段々骨抜きになつてきたね。」

「彩さん、マッサージ上手なんですね。」

「エへへ。真冬くんのためにちよつと練習したの！」

(なんだか嬉しいな……彩さんて、僕の理想の彼女だなあ……。)

「じゃあそしたら、今度は180度回つて私の方を向いて。」

「えっと、こうですか？」

「そう！じゃあいくよ～？」

「な、何するんですか？？」

「ほつペをうりうりする！」

「え？」

「うりうりうり～！」

「ちょ、ちよつと彩しや～ん！く、くすぐつたいれしゅよ～！」

「あはは！真冬くんのほつペを弄るのたのしーい！」

「彩しや～ん！」

「真冬くんのほつペ柔らかくて気持ちいいなあ……」

「こうなつたりや…」

「え？」

「えい！」

「ひやん！真冬くん！くすぐつたいよ～！」

「エヘヘ、さつきのお返しです！」

「やつたな～！」

「ムウウウ……負けまふえんよ～！」

「むぎゅうー」

「むぎゅうー」

そんな二人の頬のつねり合いはそこそこ長く続いた。

適度に疲労が溜まつた10分後

「はあー！ 楽しかった！」

「はあ…はあ…」

「真冬くん大丈夫？ やりすぎちゃつたかな…」

「大丈夫！ 彩さんとのスキンシップ、楽しいです！」

「やつぱり真冬くんはかわいいなあ…笑顔がホントにかわいいの。」

「そ、 そうなんですね…」

「そんな笑顔を私、一人占めできるんだもん。 そんな嬉しいことはないよ！」

「僕も…その…」

「ん？」

「彩さんみたいなかわいくて優しい人、見たことがないです！ ／＼彩さんを一人占めで

きるこの時間が大好きなんです！／＼＼＼

「すぐ恥ずかしい……」

「彩さん、何か言いましたか？」

「え？ ううんなんでもないよ！ そ、そしたら仕上げだね！」

「仕上げ？ まだ何かやつてくれるんですか？」

「うん、真冬くんには快眠が必要だからね。私がそのお手伝いをするよ！」

「そんなに僕疲てるんですね……」

「もう顔を見たら一目瞭然だよ。多分、いつもの睡眠が良くないとと思うからね。ちよつ

と毛布借りるね。」

「はい……」

すると彩は上体を少しだけ浮かせてソファーに仰向けて寝転んだ。寝転ぶと彩は真冬に腕を広げた。

「？ どういうことですか？」

「分からないの？ 私の胸の中においで。」

「彩さんの……胸に……」

「そうだよ。ぎゅつてしてあげる。」

日頃の疲れが蓄積している真冬にはそこが楽園に見えた。もう真冬がとる行動なんて一つしかなかつた。

「じゃ、じゃあ…失礼します…」

「そうそう。胸に顔を埋めたら真冬くんの腕を私の腰に回して。」

「こ、こうですか…？」

「上手上手！」

「僕赤ちゃんじやないですよ……」

「後は毛布をかけて、つと……これでOK！」

「……」ドキドキ

「真冬くん、緊張してるの？心臓がドクンドクンって言つてるよ。」

「ご、ごめんなさい！嫌ですよね…」

「ううん、嫌じやないよ。私も緊張してるの分かるでしょ？私の胸から心臓の音が：ね。」

「は、はい……」

「緊張してたら眠れないよね……じゃあ真冬くんが眠れるように頭、撫でてあげるね。」「お願ひします…………／＼」

「ナデナデ。」

「……」

「ナデナデ。」

彩の柔らかさと優しさが真冬を包み込む。あれだけ緊張していた真冬が終いには…

「……」スー、スー

「寝ちゃつた。やつぱりかわいい。」

「……」スー、スー

「絶対私が真冬くんを守つてあげるからね。」

夏休みに突入した感じです

暑い体育館の中でひたすらに校長先生の話を聞き続ける真冬。他の生徒達もそうしていていつの間にか我慢大会が始まっていた。

(耐えるんだ……これを耐えたら僕には……!)

夏服とは言えこの夏の猛暑を耐え抜くというのは誰にとつても厳しいもの。普段なら根をあげているのだが今回ばかりはそもそもいかなかつた。

「以上で一学期終業式を終了します。生徒は速やかに教室に戻ってください。
(はあ……後ちょっとで学校が終わる……!)

教室にて

「よっしゃあああ夏休みだ！」

「大胡君……すごく嬉しそうだね……あははは…。」

「そりやそりや！ だつて高校生の夏休みといつたら青春するしかねえだろ！ この夏休みで絶対彼女作つてやる！」

「気合いがすごい……」

「真冬はこの夏休みどうするんだ？ 勉強漬けか？ それとも……クツ……？」

「例の年上お姉さん系彼女とイチャイチャするのかああ!?」

「えつと……それは……ど、どつちもだよ！ 学年トップは維持したいか勉強はするんだけど……」

「だけどなんだ!? やつぱりキヤツキヤウフフするんだろ!?!」

「そこまでしないよ……」

「まあいい、いつか真冬を見返してやる！」

「あはは……あれ、電話だ。ちょっと待つてて。」

「お、おう。」

「もしもし……彩さん？ どうしたんですか？……え、ありますね……はい、え？ 良いんです

か？ はい！ 行きます！ ではまた後で！」

「満面の笑みでどうしたんだよ…」

「彩さんが一緒に夏祭り行こうって誘ってくれたの！浴衣で来てねって。それでね……あ。」

「真冬…てめえ…」

「ご、ごめん…」

「非リアの前でそれ言うかあ!? なあ！しかも浴衣デートかよ羨ましい！」
「わ、悪気は無かつたんだよ…ごめん！」

「ま、まあいいぜ。俺は非リア組全員と行くからな。真冬より満喫してやる！」
「そ、そつか…。」

「じゃあな！」

「うん…バイバイ…」

終始苦笑いの真冬。対照的に終始アツい大胡。はたして夏休みはどうなることやら

…

「年上で包容力がある彼女を持つなんて真冬もやるようになつたな…クツソオオオオオ
オオオ!! 彼女ほしい…!!」

大勢が集まる生徒玄関で叫ぶ大胡。多くの人の耳には入ったが誰の心も打たなかつた。

ルンルン気分でマンションに帰ってきた真冬は自宅にはいるとそこには：

「あ、真冬くんおかえり！」

「彩さん帰つてたんですね！ただいま帰りました！」

合鍵で家に入つていた彩がいた。言葉を出さずともルンルン気分なのが顔から分かる。

「真冬くんは今日から夏休みなんだね。」

「はい。宿題が少ないとは言え勉強しないとあつという間に抜かされそうですがね。」「だからつて無理は禁物だよ？真冬くん、すぐ肩に力が入っちゃうんだから。」「はい：気を付けます。」

「去年は私達受験で大忙しだつたもんね。今年はいっぱい思い出作ろうね！」
「はい！僕も楽しみにしてます！」

「いつもより真冬くんと長く居れるのか～。はあー楽しみ！」

「エへへ、あ、そうだ。僕この夏休みでやらなきやいけないことがあるんです。」「やらなきやいけないこと？何かあつたつけ？」

「僕の…失った記憶を取り戻します。」

「えつ…」

真冬のその発言はさつきまで笑顔だつた彩の表情を一瞬にして凍らせた。しかし一度真剣になれば止まらない真冬に彩の表情はどう写っているのだろう。

「夏休みが終わるまでかなり時間があります。今度こそ：僕は彩さんとの記憶を取り戻します。忘れたままなんて嫌ですから！」

「真冬くん…」

「ごめんなさい、いきなり真剣な話しちゃって。話の腰折っちゃいましたよね。」

「う、ううん大丈夫だよ！さつきも言つたけど無理しないでね。」

「は、はい！」

「他に夏休みで予定とかある？」

「あ、8／13に一度実家に帰省することになつてるんですけど…彩さんも一緒にどう

ですか?」

「わ、私!」

「はい、父に彩さんのこと改めて紹介したいんです。どうですか?」

「……」

「彩さん?」

「ごめん真冬くん! その日予定もないし行こつかなあははは……」

「ホントですか?! ありがとうございます!」

「うん: 何気真冬くんのお父さんと会うの、これが初めてなんだよね……」

「そうなんですか。ごめんなさい、そこのところうろ覚えで。」

「気にしなくて良いよ。じゃ、私浴衣に着替えてくるから真冬くんも着替えてね。」

「あれ? そういえば彩さんて自前の浴衣持つてましたつけ?」

「真冬くんのために買つちやつたの。楽しみでつい!」

「そうなんですね。じゃ、後で会いましょう。」

「うん! また後でね!」

――――――――――――――――――――――

彩の家にて

「大変なことになつたな……。出来れば記憶を取り戻してほしくないけど……どうすれ

ば良いのかな……」

喜びと憂鬱が混じった彩。

この夏で二人の運命は大きく変わる。

夏祭りを満喫したい感じです

「よし、着替え終わつた。彩さんはもう着替え終わつたかな。」

胸を躍らせて深緑の浴衣に着替え終わつた真冬。真夏の暑さなんて吹き飛ばすほどに夏祭りを満喫する気だ。一度なにかを決めると他のことを考えられなくなるくらい真っ直ぐ突き進む真冬らしいのだが。

準備してきたものを持つて彩の家をノックする。

「彩さん、準備できましたか～？」

「出来たよー！」

「入りますね。」

ドアを開けた先には：

「真冬くん…どうかな？」

桃色の浴衣に身を包んだ彩がいた。花柄の浴衣にいつもは下ろしている髪をポニー
テールに縛つてイメチェンに成功したみたいだ。

「すぐ……かわいいです！」

「ホントに!? ありがとう真冬くん！」

「髪型も変えたんですね。すごく似合ってますよ。」

「そんなに誉められると照れちゃうな…」

「…照れてる彩さんもかわいい。」

「もう：真冬くんったら。／＼真冬くんの浴衣もすぐ似合ってるよ！ かつこいいね
！」

「エへへ。嬉しいです。」

「じゃ行こつか！ 手、出してほしいな！」

「はい！」

手を繋いで夏祭りの会場へと向かう二人。胸を躍らせているのが手の降り幅に出て
いるのは本人達は多分気づいていない。そして真冬と彩を羨望の眼差しで見て
いる大

胡がいることなど知る由もない。

夏祭り会場に着いた二人。夕方に差し掛かった時刻で早速二人が向かつたのは……

「真冬くん、私ね、夏祭りでやりたいことがあつたの。」

「どちらなんですか?」

「射的! 景品は真冬くんにあげる!」

「ホントですか!? ありがとうございます!」

「よし、真冬くんのためにも頑張るよ!」

射的ブースに到着

「見てて真冬くん! 絶対景品を打ち落として見せる!」

「お、君たちカッフルかい?」

「え? そうですけど……」

「じゃあ弾二発追加! 彼女さん頑張つてくれ!」

「え、いいの!? ありがとうおじさん!」

「彩さん、僕達恋人に見えているんですね//」
「ホントだね。なんか嬉しいね//」

そして射的スタート。狙うには狙うが当たらない。当たつてもなかなか景品が落ちない。弾が後一発しかないと言うところでついに…

「やつた！打ち落とした！」

「彼女さんおめでとう！三等だ！」

「彩さんおめでとうござります！」

「嬉しいよ真冬くん！景品はなんだろうな～♪」

景品に胸を躍らせていると屋台のおじさんが景品を渡してくれた。その景品とは…

「はいよ景品！」

「え？ なにこれ……」

「三等の熊の剥製のミニチュアだ！玄関にでも飾ってくれ！」

「あは…アハハ…」

渡されたのは熊の剥製。苦笑いが止まらなくなるのも無理はないだろう。

「彩さん……すごい景品を渡されましたね…。」

「うん……真冬くん、これもらつても迷惑だよね…」

「ううん、ください！」

「……え？」

「だつて彩さんが頑張つて手に入れてくれた景品なんですから。どんな景品でも僕は嬉しいですよ！」

真冬の一言は彩にとつては衝撃的であつた。満面の笑みが添えられた一言に彩がする反応は一つしかなかつた。

「…………」

「彩さん？どうしましたか？」

「よしよし。」

「ちよ、彩さん！？／＼」

悶絶。その後頭を撫でる。まあ今出来る最大の表現だろう。

(彼氏さんよ…いい男じやねえか。)

屋台のおじさんはひそかに思うのみ。

日もすっかり落ちたところで真冬が恥ずかしげに提案する。

「あ、僕りんご飴食べたいんですけど彩さんも何か食べますか？僕買つてきますね。」

「ありがとうございます。私もりんご飴でいいかな。」

「分かりました。あそこのベンチで待つてください。」

「うん分かった！」

(これ…彩さんに引かれないかな…//)

何かを思いながら五分後、真冬が彩の所へ帰ってきた。

「彩さん、お待たせしました！」

「ありがと！」

真冬がベンチに座ると彩があることに気づく。

「あれ？りんご飴一つしかないよ？」

その回答は…

「二人で同じものなら…一つで充分じゃないですか……／＼

「え、それって……／＼」

「それ以上は言わないでください…／＼／＼」

「真冬くん大胆だね…」

「ごつ、ごめんなさい！嫌ですよね…す、すぐに二つ目買つてきますから！「真冬くん！…え？」

「一本でいいよ…／＼」

「それってつまり…／＼」

「私、嬉しいんだよ？真冬くんがここまでアタックしてくれるの。」

「自分でやつておいてなんか恥ずかしくなってきた……／＼／＼

「自爆した？もう、かわいいんだから：ほつぺたツンツン！」

「もう！からかわないでくださいよ～！」

「エへへ。だつて真冬くんがかわいいんだもん！」

「もう：彩さんを照れさせたかったのに～！！／＼

「残念でした～！」

結局自爆した真冬。照れさせる作戦は失敗に終わった。……と、思いきや

（真冬くん……私どうすればいいの……／＼）

爪痕は残したようだつた。二人でりんご飴を食べてるときは真冬からどんな風に見えていたのだろうか。

「あれ？なんだかあそこすごく盛り上がつてるね。」

「ライブ…でしょうか？」

「男の人が多いみたいだけど…行つてみようか！」
「はい…」

この時真冬の脳裏に嫌な予感がよぎった。そしてそれはすぐさま現実となる。

「うわ！人多いね！」

「うう…僕身長低くて見えない……。」

真冬が見えないことを察知して彩が真冬を抱き抱えた。

「あ、ありがとうございます。」

「どう？これで見えるかな？」

「はい。見えます…ってあの人は！」

ステージ上にはマイクを握りしめ全力で歌う真冬のマブダチ、大胡がいた。

「ん？真冬くんの知り合い？」

「彩さん！すぐに下ろしてください！」

「え？ なんで？」

「あの人儕達と一緒にいるところを見られるとヤバインです！」

「そ、 そうなんだ……」

彩が真冬を下ろして二人は大胡の歌…というより魂の叫びを聴いていた。

「俺／には／＼彼女はいらなーい!!」

「ハイ！ハイ！」

「す、 すごい歌詞だね……」

「お客様も盛り上がりがつてますね……。」

三分後…

「皆ーー！ どうもありがとうーー!!」

「ワアアアアアアアア」

「会場が揺れてるね……」

「歌詞的にお付き合いされてない男性が多いのも納得できますね。」

「曲が終わつたつてことはマイクパフォーマンスもあるつてことだよね?」

「そうですね。なに喋るんだろう…」

「お前ら! 彼女いないよなあ!」

「イエエエエエエエエイ!」

「リア充、羨ましいよなあ!?」

「イエエエエエエエエイ!!」

「だけどな、今回の夏祭り、リア充が結構いるんだよ!」

「ええええええええええええ!?」

「だがな、彼女いない歴!! 年齢の俺が、てめえらの気持ち歌つてやるからな!」

「ワアアアアアアアア!!」

「行くぜ二曲目!」

そして激しいドラムが鳴り響き二曲目が始まった。お分かりいただけた通り大胡の歌は彼女がいなない男子諸君に突き刺さるため絶大な人気を誇っているのだ。しかし、彼女が今まさに横にいる真冬がこの会場にいれるはずもなく…

「彩さん、一旦引きましょ。なんかすごい気まずいです。」「そ、そうだね……」

二人は会場からそそくさと逃げていった。

次に一人が訪れたのは…

「真冬くん、私スーパー・ボール掬いやりたいの！いい？」

「ボール掬い：僕もやりたいです！」

「よし、やろうか！おじさん！二人分お願ひします！」

「あいよ！つて、君たち青春してんnaa：俺にもそんな時代があつたんだよ。」

（あれ？この展開：長話を聞かされるのでは？）

真冬の予想通りこの人の青春時代を十五分ほど聞かされることになつた。やはり人の惚氣話というのはあまり聞きたくないものであり二人を退屈させるには充分だつた。そして惚氣話もようやく終わり、いよいよボール掬いへ。まずは彩の番。

「頑張つてください！彩さん！」

「よし、頑張つちやうよ！」

目に力が勝手に入り彩の手が震え始める。それでも負けまいと気合いを入れてポイを水中に入れたが結果は…

「あつ……」

「お嬢さん残念だつたなあ。はい次！」

「真冬くん：私…」

「そ、そんなに落ち込まないでください！僕が彩さんの分までとりますから！」

「えっ、ホントに!? もう真冬くん大好き！」

「ちょっと：人前ですから：／＼」

屋台のおじさんがよくない目で見てくることもあつて真冬の恥ずかしさが最高潮に達したところで真冬の番。真冬はいつになつたら彩に抱きつかれるのに慣れるのだろうか。

「集中して……力を抜いて……一瞬で取る！やった！彩さん、まず一つ目取れましたよ！」

「す、すごい真冬くん……」

「この調子で二つ目も……よつと。やつた！二つ目も取れた！」

「あんちやんやるじやねえか！あい、ボール2つ！」

「取りましたよ！これが僕の分で……はい、これが彩さんの！」

「ありがとう！真冬くん、宣言通り2つとつたね。やつぱりすぐいよ真冬くん！」

「そんなに誉めないでくださいよ……照れるので／＼／＼

「恥ずかしがりやさんだなあ……ほつぺたツンツン！」

いやつきながら屋台を去つていく二人。その姿を見てかつての青春時代を重ねる
屋台のおつちやんだつた。

「さて、いよいよ夏祭りのクライマックスの花火だよ！」

「ですけど彩さん……」

「ん？どうかしたの？」

「なんでこんなに暗い山奥なんですか？」

花火を見ようとする二人。しかし彩が真冬を連れてきたところは人気のない、暗い山奥だった。

そしてその山道を登ること数分後、ベンチがポツリと置いてある見晴らしのいいところまで来た。

「到着！」

「あれ、この街にこんなに見晴らしのいい場所があつたんですね。僕知らなかつた。」

「多分ここに来るの私だけだと思うよ。ここなら誰にも邪魔されずに思う存分花火が見れるよ！」

「そうなんですね。」

ベンチに二人が腰掛け、真冬が何かを喋り出そうとする。

「彩さん…」

「ん？どうしたの？」

「ぼ、僕…その…」

「あ！花火が始まつたよ！」

「え？あつ……」

何かを喋り出そうとした真冬を花火が遮る。罰の悪そうにする真冬の隣で彩は花火を笑顔で見ていた。二人の顔がほんのり様々な色に染まる。

「きれいだね……」

「……そうですね。」

暫く無言で花火を眺める二人。そして彩が切り出す。

「ねえ真冬くん。さつき話そうとしてたことって何？」

「あ、それなんんですけどね……僕、彩さんに告白したこともされたことも覚えてないじゃないですか。」

「え？う、うんそうだね……」

「だから……告白代わりと入つてはなんですが……彩さん!!」

「は、はい！」

「こつ、これからも、僕と一緒にいてください！よろしくお願ひします！」

花火の号砲にも負けない渾身の大声での彩への告白。正直この発言がなんなのかな
んて真冬にはどうでもよかつた。面と向かっての真冬の告白に彩の返答は…

「……」

「あ、彩さん？やつぱり……いきなりこんなこと言わると困っちゃいますよね……」

「ううん違うの！」

「え？」

「私、真冬くんともつと一緒にいたいと思つたから！だからその告白、私、凄く嬉しい

……／＼

「彩さん……／＼

「真冬くん、目、閉じて。」

「えつと…こうですか？」

「そうそう。行くよ？」

「はい……」

58 夏祭りを満喫したい感じです

「
チ
ユ
」

「!?

「真冬くん、びっくりしちやつたかな? //
「ち、ちち違いますよ彩さん! // その:」

「ん~?」

「嬉しかつたです。//」

「エへへ。そつか。」

花火に照らされた彩の笑顔が真冬の心を擊つ。

「来年も……また来ましようね。」

「来年、か……また来たいね。」

「帰りましょうか。」

「……うん。」

真っ直ぐな真冬とは対照的に不安が襲いかかる彩。それでも決心は変わつていない
はずなのだ。

(絶対私が真冬くんを守る。そう決めたはずなのに……なんでこんなに弱気になつてるので
…。私のバカ。)

記憶のヒントを集める感じです（上）

来るべき8／13。早朝から少しばかり真冬が意気込んでいた。駅のホームに着いた頃にはもう眠気なんてなかつたのである。

「真冬くん？」

「…」

「おーい、真冬くん？」

「!? は、はい！」

「緊張しそぎなんじやない？ もうちょっとリラックスしてもいいと思うよ。」

「そうしたいのは山々ですけど…自分の記憶を取り戻すつてなるとなんか意気込んでやつて…」

「うーん、真冬くんらしいといえば真冬くんらしいけど。そうだ！ 真冬くんがそんなに肩張つてるなら私が肩揉んであげるね！」

「えつ、そんな…………ふにやあ…」

少しだけいちやついていると岐阜行きの新幹線が来たので早速乗り込んだ。新幹線内ではまあ大人しくしてた…とは言いがたい。相変わらず彩のアタックが凄まじい。

「ということで着きましたね。」

「そうだね。と言つてもそんなに自然豊かな感じではないんだね。」

「僕の実家は駅近くなのでここから歩いていくつもりですけど…いいですか？」
「うん、大丈夫だよ。」

「手、繋ぎましょうか。」

「……うん。」

彩の、真冬を握る手はいつも以上に力が入つていた。

（お願い…無事に終わつて。記憶が戻るなんてことがありませんように。）

その願いは誰に届くのか。

「彩さん、手に力が入つてますけど大丈夫ですか？どこか具合が悪いとか……」

「え？ ううん！ な、なんでもないよ！」

「そうですか……ここが僕の実家です。入りましょくか。」

「……うん。」

(なんかいつもと様子が違う……変な彩さん。)

古風な家のインターほンを淡々と鳴らすとガラツと玄関のドアが開いた。そして中から明らかに厳格そうな男が現れた。

「真冬か。元気にしておつたか。」

「うん。」

真冬の父、高部鉄である。

「彩さんも元気そうですね。いつも真冬が世話になつております。」

「いえいえ！ むしろ私が真冬くんの世話になつてるくらいです。」

「まあまあ、立ち話もここまでにして中に入つておくんなせえ。」

そうして二人は室内へと足を踏み入れる。どこまでも真っ直ぐな目をしている真冬とは対照的に彩の目には不安が宿つていた。

木造の屋根と畳といった和風な居間に二人が横並びに座つた。そして二人の対面に真冬の父が座禅で座る。その姿から威厳を感じることは容易い。

「真冬。東京での生活はどうじや。」

「順調だよ。学校でもいい友達に恵まれたし、学業でも特に問題はないよ。後は……彩さんの存在が大きいね。」

「ほう……彩さんには感謝してもしきれませんな。」

「私も、真冬くんにはいっぱいお世話になつてるところもあります。私が感謝したいところです。」

「そうですか。さぞかし楽しんでいるようですね。」

「あ、そうだ。父さん。」

「なんだ？」

「母さんに線香あげてもいいかな？」

「ああ。あげていってくれ。」

「それなら私も。」

「ありがとうございます。きっと、天国で母さんも喜んでいることでしょう。」

そして線香をあげる二人。あげ終わると彩が切り出した。

「そういえば真冬くん。記憶がないって言つてるけどいつ頃からの記憶がないの？私聞いたことなかつたよ。」

「うーんと……だいたい小学校に入学したくらいから中学3年の冬まで記憶が無いんですけど。」

「結構忘れてるんだね……」

「卒業アルバム見ても何もピンと来ないし……僕どうしたら……。あ、父さん。中学の頃の卒業アルバムってどこにあるの？」

「真冬が東京に持つていったのではないか？」

「違うよ。持つていってないもん。」

「どういうことだ？この家にもないぞ？」

「絶対おかしいよ！あんなに目立つものなくすなんてこと無いよ！」

「まあまあ真冬くん。もう一回自分の部屋とかを探してみたらどう？案外簡単に見つ

かつたりするかもよ。」

「彩さんが言うなら……父さん、僕探してくる。」

「そ、そうか……」

そう言つて真冬は2階への階段を全力で駆け上がつた。真冬が行つた後の居間には数秒の静寂が流れたがその後二人は一つ、息をついた。

「ふう……でもどうしたら……」

「卒業アルバムが見つかることはありません。そう簡単に記憶が戻ることは……」

「で、でも！ここで真冬くんを諦めさせないといつ記憶が戻るか分かりませんよ！もし真冬くんの記憶が戻っちゃつたら……」

「落ち着いてください！もし記憶が戻つたとしても真冬ならきっと耐えられるはず。」「でもこの作戦に加担したのは真冬くんが心配なんだからじやないんですか……？」

「……」

「真冬くんを諦めさせましょ。そうしたら真冬くんは知らなくていいことを知ることは無いんですから……。」

無理やり彩が父を丸め込んだ。知らなくていいことを知る恐ろしさというナイフで父を丸め込んだのだ。

そして真冬が2階から帰つてきた。

「うーん……無かつたなあ……。」

「真冬。」

「なあに？」

「今更だが、なぜそこまでして記憶を取り戻したいのだ。もしかしたら、知らないほうがいいこともあるのかもしれないのだぞ？」

「それでもいい。僕が知りたいだけ。」

「本当にいいのか？」

「……え？」

「思い出したくないことを思い出してそれに縛られてしまうことだつてあるのだぞ？ だつたら「うるさい!!」つ!?」

「僕がそんなに弱いと思つてるの？ そんなに信じられないの！？ だつたら見せてあげるよ……そんな記憶にも立ち向かうだけの勇氣があるつてことを!!」

「真冬くん……」

「とりあえず外に出て思い出せるか試してみる。彩さんはゆっくりしてください……」「あつ、待って真冬くん！」

悔しさを目にじませて真冬は勢いよく外へ飛び出していった。啞然とする鉄。面を食らった顔であつた。

「私、真冬くんを追いかけけてきます。」

「真冬を……頼みます。」

「……はい。」

鉄は彩の背中をずっと見守り続ける。それと同時に真冬に想いを馳せる。

（真冬……。私が過小評価しすぎていたのか……。信じきれず……すまんな。）

一方彩は全速力で街を走り回っていた。

（私……真冬くんを守るつて言つてるのに……これじゃ裏切り者じゃん……。彼女失格

だ
ね
…
。)

記憶のヒントを集める感じです（下）

「ここなら……誰も来ないよね……」

真冬は高部家から走つて10分程の土手に來ていた。車通りが多いコンクリート製の橋の真下、全く日が当たらないところでただひたすらに佇んでは流れる川をボーッと眺めていた。

「なんで……僕を信じてくれないんだろう……」

記憶のことに関する……どころか真冬は幼い時から父にはあまり信用されずに育つてきただ。昔から父に信用されてこなかつたのは慣れっこな真冬の目には何の理由かは知らないが涙がこぼれていた。

一人で沈んでいること20分、コンクリート製の橋の柱から声がかかつた。

「やつぱり。真冬くん、ここにいたんだね。」

「…………彩さん？」

真冬の脳内を引っ搔き回す事案が発生。彩に居場所を伝えずに家を飛び出したははずなのにその場所を彩に当てられた。いつもなら驚く真冬だが今回はそうでもない。驚嘆より悔しさの方が勝っているからだ。

「どうしてここが…………？」

「…………なんとなく、かな。」

気になることが多すぎた真冬だがそれ以上は聞かない。聞く気力も無かつた。

「僕……父さんに信用されてないんですよ。」

「…………」

「さつきだけじゃない。今までもそうだ。僕は信用されてこなかつた。」

「…………」

「都内一の高校に入つて見返そつたのに効果は0。もう…………悔しいよ…………。」

「真冬くん……」

「だから彩さん……僕のこと、放つておいてください。」

「……出来ないよ。」

「なんですか。こんなにネガティブなことばかり言つてる僕の近くにいたら彩さんまでネガティブになりますよ。」

「違う。」

「違わないですよ。こんなに弱い僕が許せない。そんな怒りを彩さんの前で見せたくない！」

「…」

「頼むから放つておいてください！こんな僕・誰にも見せたくないんです！」

心からの叫びを彩の心でしつかり受け止める。その彩がやる行動はただ一つ——
——包容であった。

「放つておけないよ。」

「なんですか…。こんな僕、嫌じやないんですか？」

「嫌なわけ無いよ。そういうところまで含めて、私は真冬くんのことを好きになつたんだから。」

「……」

「辛かつたら私がいるよ。いつでも抱きしめてあげるからね。」

短いやり取りだつた。だけど甘い蜜だつた。

その甘い蜜の誘惑に勝てるはずもない。荒んでいた真冬の心に甘い蜜が染み渡る。もう何の涙かは分からない。だが涙腺が決壊した真冬はしばらく彩の胸の中にいた。

――――――――――――――――――――――――――――――――――

「落ち着いた？」

「はい……ごめんなさい。」

「いいんだよ、謝らなくて。」

「でも…」

「？」

「彩さんと一緒にいると、なんか落ち着くんです。えへっ、なんででしようね。」

「それは：私にも分からぬいかな。」

「……そうですか。」

「でも安心したよ。真冬くんに少し笑顔が戻ってきたからね。」「やっぱり……彩さんと一緒に来れて良かったです。」

「……そつか。」

優しい笑顔で返答した彩。一段落したところで真冬が踏み込む。

「そういえばトトロって……」

「ん? どうかしたの?」

なんか見覚えあるんだよなあ……」

卷之三

「ううん……見覚えあるのに思い出せない。」

「そんな……無理して思い出そうとする必要もないんじやないかな。

と思うけど……」

「でもなんか思い出せそうで思い出せなくて……不思議ですね。」

「そ、う、なん、だ、…。」

自然に思い出せる

この風景に心当たりがあるという真冬。思い出せそうという言葉に反応しそうだったがその心を引っ込んだ。

(真冬くん……この風景ね、私も見覚えあるんだ。忘れもしないよ。)

真冬を無理させないように彩がまた話を切り出す。

「ねえ真冬くん、先に言つておかなきやいけないことがあるんだけど……いいかな?」「え? なんですか?」

「もし真冬くんが記憶を思い出せたとして……真冬くんのトラウマまで思い出しちゃつたら……そのときは無理せず私に言つてね。私、真冬くんを支えるつて決めたんだから。」

「……あ、ありがとうございます!」

(うんうん。真冬くんと言つたらこの笑顔だよ。はあー癒される。)

「あ、そうだ。行きたいところがあるんですけどいいですか?」

「うん、いいよ。どこなの?」

「それは……」

「……」

「ここって……真冬くんが通つてた中学校？」

「そうです。唯一中学のアルバムだけなかつたので見ておきたかつたんです。」

「そうなんだ。」

「何か思い出せるといいけど……すこし回つてみますね。」

「うん、そうしようつか。」

真冬は彩と共に校舎の周りを一周してきた。もう少しで一周するというところで真冬の足が止まつた。

「あれ、ここは……」

「ん？ 見覚えあるところ？」

「はい……さつきの橋の下と同じでうつすらと見覚えがあります。」

「そうなんだ……」

「ちょっと待つててください……なんか思い出せそうなんで……」

そうして少ないヒントを便りに記憶の迷路を辿つていった。そして三分ほどした後、真冬に異変が襲いかかる。

「うつ……あ……あああ……ああああ!!!」

「つ?!どうしたの!真冬くん!!」

「何……この情景は……あああ……つああああ!」

「真冬くん!」

テレビの電源がついたかのようにいきなり真冬の脳内に表れた風景とは中学時代の……鈍器を持つた大勢の人々に囲まれて いる風景だつた。

あの日が沈んでいた橋の下で何があつたかは分からぬが真冬にとつて恐怖の対象であることに変わりはない。

「はあつ……はあつ……なんだつたんだ……」

「大丈夫だつた!真冬くん!!」

「あ、…彩さん……なんとか大丈夫でした……。」

一瞬ではあつたが真冬には恐怖として刻まれた映像。だがなんとかしのいだようだ。

「取り敢えず、気を失わなくてよかつたよ……。突発的なものだとそういうこともあるらしいからね。」

「はい……」

「一旦実家に戻ろうか。立てる？」

「それが……腰抜けちゃつて……」

「そつか。じやあおんぶしてあげるね。」

「えつ！い、いいんですか？／＼

「何？緊張してるの？？」

「そ、そそんな訳無いじゃないですか。」

「緊張してるのがバレバレだよ。ほら、乗っていいよ。」

「は、はい……／＼

「じゃあ、レツツゴー！」

（彩さんのおんぶ気持ちいい……）

（どうどう記憶の片鱗が出てきちゃつたのか……全部思い出すのも時間の問題なのか

な。そしたら……もう真冬くんとは一緒にいられないね。」

「じゃあ父さん、僕達帰るよ。」

「そうか……すまないな。信じてあげられなくてな。」

「……もういい。」

「真冬くんのことは私に任せてください。しつかり支えますから!」

「彩さん……私の息子を、頼みましたぞ。」

「じゃあね、父さん。」

その帰り道の新幹線でのことだつた。

「ねえ真冬くん。」

「なんですか?」

「ちょっと嫌なこと思い出しちゃつたでしょ?」

「え?ええ……」

「だからね、明日、海行こうよー。」

「海……ですか?」

「だめ？」

「いいですよ。僕も行きたかったので。海水浴ですか？」

「そう！二人だけのハネムーンだよ？」

「……」

「真冬くん？」

「あ、ああごめんなさい。」

「ボーッとしちゃつてました……」

「もしかして私の水着姿を想像してた？エツチなんだから／＼し、してないですよ！／＼」

「エヘヘ、また楽しみが増えたね。」

「エヘヘ…そうですね！」

想いをのせて、彩は真冬の小さい手を優しく握りしめた。

海で思いつきり遊ぶ感じです

「さて……後は彩さんを待つだけだね……。」

真冬の帰省の翌日。二人は静岡のとある海水浴場に来ていた。皮膚に照りつける太陽光と雲一つ無い晴天がはしやげと言わんばかりに夏を象徴している。現在真冬がパラソルやら何やらのセットティングを完了して彩が来るのを待っていた。辛いことがあつた分、彩と思いつきり遊ぶことができることに胸を躍らせてているのかその心の高まりが鼻歌に表れている。

それから待つこと一分後……

「お待たせ真冬くん！」

「わっ！ ビックリした！ ……いきなり抱きつかないでくださいよ……。／＼

「もう……真冬くん、私達付き合ってから結構経ったのにまだハグに慣れてないの？ そろそろ慣れてほしいな。」

「そういう彩さんこそ……ツ！ ／＼

「ん？どうしたの？」

真冬が振り返るとそこにはフリルビキニ姿の彩がいた。淡いピンクで無自覚にも真冬の顔が赤くなつてていく。そのせいか真冬の動きがピタリと硬直してしまつたが数秒してなんとか言葉を振り絞つた。

「す、すごくかわいいです……／＼／＼

「！ホントに！？すつづく嬉しいよ！この水着ね、真冬くんに喜んでもらうために時間かけて選んだの。エヘヘ、真冬くんに誉めてもらつちゃつた！」

「……／＼

「あれ？ 真冬くんどうしたの？」

「いつ、いえ！ 大丈夫ですよ！」

「そんなこと言つて……私に視線が釘付けだよ？」

「えつ！？」「つ、ごめんなさい！／＼嫌ですよね……。」

「ううん、むしろ嬉しいよ！ だつて今日の私をかわいいくつて思つてくれてるんでしょ？」

「恥ずかしがらなくていいんだよ。」

「そうですか……／＼でも自然と顔が赤くなっちゃう……。」

「そういうところ、私は大好きだよ！さ、速く行こー！」

「あつ、でもその前に…」

「ん？ 何かあつたつけ？」

「日焼け止めを塗つとかないと帰る頃に皮膚が痛んじやいますよ。」

「そつか。真冬くんが今シャツを着てても日焼けしちゃうかもね。じゃあ私が塗つてあげるね。横になつて。」

「あ、お願ひします。」

「あつ、これ結構冷たい……。いくよ。」

「ひやんつ！」

「ごつ、ごめん！くすぐつたいかな……。」

「だ、大丈夫ですよ！これくらい……。ひやん！」

「あ、真冬くんが脇に弱いの忘れてた…。こしょこしょこしょく」

「アハハハ！くすぐつたいですよ～！」

「もつといくよ～！」

「ちよつとやめてください！アハハハ！」

「ハア…ハア…今度は僕が塗りますね…。」

「ごめん…調子にのっちゃつた…。疲れちゃつた?」

「ううん、大丈夫ですよ! 彩さんも冷たかつたら言つてくださいね。一応冷たくしない
ようにはしますけど…」

「うん、ありがとうございます。」

「じゃ、背中行きますね。」

「つ!ひゃん!//」

「!ごつ、ごめんなさい!さつき冷たくしないようにするつて言つたのに…。」

「ううん…大丈夫だよ。続けて塗つちゃつてほしいな。」

「あ、お尻塗りますけどいいですか?」

「うん、いいよ。」

「ひとつ」

「ひゃんつ!//あああん//」

「ええつ!」

「ごめん…いきなりで驚いちゃつたよね…。」

「いつ、いえ…このまま塗りますね! (彩さんつてたまに色っぽい声出すんだよね…。セ

クシーな一面も持つてゐるんだなあ……。」

「うん、おねがい。（マツサージみたいで気持ちいい……。）

三分後

「よし！お互に塗り終わりましたね！」

「じゃあ海に入ろつか！」

「せーの！」

じやぶーん

「フハア！冷たくて気持ちいい～！」

「ですね！あ、僕浮き輪使つていいですか？」

「いいよ！じゃあ私押してあげるね！」

「よっこいしょ……じゃあおねがいします！」

「いくよ～？すいすいい～！」

「キヤハハハハハ！楽しい～！」

「まだまだ行くよー！すいすいー！」

「アハハハハハハ！」

(いつもしつかりしてる真冬くんだけど……) ういう子供っぽい一面もまたかわいいんだよね。)

「アハハハ！ つてうわっ！」

—わあ！浮き輪から落ちちゃつた！

「ブクブクブク……ブハア！あはは……真っ逆さまに落ちちゃいました……。」

「ビツクリした！いきなりだよ。」

「彩さんは大丈夫ですか？僕の足が当たっちゃつたり……」

「大丈夫だよ。こんなときまで私の心配をして……もうっ！ 真冬くん大好き～！」

「あ、彩さん!?」

急に抱きつかれたもので焦る真冬。彩の質のいい素肌を顔で感じ取っているためまた顔が最高潮に赤くなっている。

「彩さん、こんなのは持つてきました！」

——水鉄砲？

「はい！そこそこ値段が高かつたのでこれは期待できますよ。はい、彩さんの！」

「ありがと。えーと……ここに水を入れるのかな…？」

「隙あり〜！」

「きや！」

「えへへ。先制攻撃で撃たせてもらいましたよ、彩さん！」

「やつたな〜？くらえ〜！」

「うわっ！」

「お返しの水鉄砲だよ！まだまだ〜！」

「キヤハハハハハ！僕もやられっぱなしじゃないですよ〜！」

「あはは！樂しくい！」

水鉄砲で全力で楽しむ二人。一方二人とは別で海に来ていた”ある男”がその光景を見ていた。

「あれは……真冬とその彼女さん？だよな、間違いねえ！……チクショウ、夏休みを満喫してやがる……くつそおおおおお！俺も彼女ほしいいいいいいい！」

真冬の親友、大胡だ。男友達と来ていてたまたま同じ海で巡り会つてしまつた。その悲痛な叫びは誰にも届かなかつた。

「ん？」

「真冬くん、どうかした？」

「どこからか聞いたことのある声が……」

「え？ なにそれ怖い……」

「まあ気のせいですよね！」

「そつか。じやあ続き！ くらえ～！」

「キヤハハハ！」

「ちよつとそこのお姉さーん！」

「え？ 彩さんのこと呼んでるのかな？」

「ど、どうなんだろ……」

「そこのピンク髪のお姉さーん！」

「あ、私のことだつた……。はい……なんですか？」

真冬と彩が振り返るとそこには金髪の男が六人揃っていた。ネックレスや入れ墨も見えており、柄が悪いことがうかがえる。二人ともポカソんとしていたがそれは次第に恐怖へと変わる。

「お姉さんきれいだよね。よかつたら俺達と遊んでかない？」

「彩さん……これつて……」

「うん、ナンパだね。」

「ここは僕が……」

「え？」

「あのー、この人は僕の彼女です。悪いですがナンパなら他を当たつてくれませんか。」「あのなおちびちゃん。俺らはそこのお姉さんに用があるんだよ。テメエは引っ込んでな。」

「引っ込んでなんていられません！人の恋人をナンパして奪おうだなんて……そんなの僕が許さない！」

「真冬くん……／＼」

「テメエな……用がねえつってんだろ！これ以上楯突くなら容赦しねえぞ！ああ！」

「……」

真冬の、彩の手を握る手は震えてる。それでも気持ちが先走る真冬が出す結論は一つ
だった。

「やつてみろ！」

「!?」

「真冬くん!?」

「……ハハハ！ そうかいそうかい！ なら一発！」

男は拳を振りかぶつて真冬の顔面へと放つた。鈍い音と共に拳が真冬の顔面にぶつ
かる―― 直前でその拳が止まつた。いや止めたのだ。彩が。

「な！」

「今……私の彼氏に手を出そうとしたよね。」

「?! いだだだだだ！ テメエ！ なんつう馬鹿力なんだよ！」

「もし手を出して怪我でもさせたら……ただじゃおかないよ。絶対に手出しあらせな
い。」

「……」

「彩さん……」

「……ハハハ、 そうかよ。 だけど、 それは素手だつたらの話だろ?」

「……どういうこと?」

「こういうことだよ。 やれ!」

「ああっ!」

真冬の後頭部から鈍く、 甲高い音が鳴り響いた。 真冬は銀色のパイプの先端だけを目に入れてそのまま意識を手放そうとしたが、 謬謬としながらもなんとか耐えている。

「真冬くん……? 真冬くん!?

「あ……ああ……」

「絶対に手出しあさせないとか抜かしてたな! じゃあ後ろからの攻撃はどうなんだよ! ああ!?

「真冬くん……ごめんね。」

「これで分かつただろ?俺らに歯向かうとどうなるかをな! ハハハ…ぶほおつ!」「……許さない。」

怒りに任せ、ただただ拳をふりつづける。その彩の姿が真冬には恐怖としか映らない。そして達の悪い男達は逃げていったが、彩の頭の中は焦りと謝罪の気持ちでいっぱいになっていた。

「彩……さん……僕……」

「真冬くん!? 大丈夫!? 真冬くん! ま……くん……。」

目が覚めると真冬は先程のパラソルの下にいることに気付いた。それと同時に真冬の頭が彩の胸の中にいることにも気付いた。

「ううん……あれ……？僕……無事だつたの……？」

「！真冬くん……目が覚めた？」

「彩さん……あれ？この包帯は？」

「真冬くんをここに運んでから私が手当てしたの。幸い出血してなくて良かつた……。

その様子だと……脳の方にも影響は無さそうだね。」

「ありがとうございます、彩さん。僕のこと助けてもらつて……」

「ううん、結果的に真冬くんに怪我させちゃつたんだもん。お礼はいらないよ。」

「それでも……彩さんが手当してくれなかつたら今頃どうなつてたか……彩さんは僕にとつての命の恩人なんです。」

「真冬くん……大好き。」

「えへへ、彩の胸の中にいると嬉しくなつちやうんです。彩さんのことが好きだからな

のかな……。」

「そつか……。帰る前に私の大学の病院に行こつか。真冬くんの頭の検査しとかないとね。私も付き添うよ。」

「ありがとうございます。やっぱり彩さんは頼もしいです！」

「日もすっかり暮れちゃつたし帰ろつか。あ、なんかやり残したことある？」

「うーん……いっぱい遊んだし、後悔はないです！」

「そつか。立てる？ 介助してあげるね。」

「あ、お願ひします。」

「せーの、よつこいしょ。」

「よつ、と……あれ？」

「ん？ どうかしたの？」

「彩さんのお尻から血が……」

「血！？ そういえばさつきからなんか痛いと思つたら……」

「磯の方に行つたときに多分蟹に挟まれたんですよ。ちよつと待つてくださいね、絆創膏が確か……あつた。貼りますね。」

「ん、ありがとう。」

ぶにつ

「ひやんつ！／＼」

「あつ！ 彩さんごめんなさい！ 触られるの嫌でしたよね……」

「ううん、 真冬くんならいいんだよ……／＼」

「なんかこつちまで恥ずかしくなつてきた……／＼」
 「それにしてもよく血が出てるなんて気付いたね。 もしかして私のキュートなお尻に
 ずっと釘付けだつたのかな～？」

「そ、 そうじやないですよ！」

「いいんだよ。 私のお尻揉みたいんでしょ？」

「えつ……／＼」

「すこしだけならね……／＼」

「…………はい／＼」

結構長い時間触っていた。 また一步大人の階段を上つた真冬なのだつた。

夕日が差し込んで淡い緋色の空間が出来上がつた電車内には人気は全く感じられず、

真冬と彩だけが座っていた。華やかさの欠片もないプラトニックな空間で今日のこと振り返っていた。

「でも彩さん、包帯を巻けるなんてすごいですね。すぐカツコいいですよ！」

「真冬くんから誉められると照れちゃうなあ。私文系の学部に行つたのになぜか包帯の巻き方を習つたんだよね。でも習つておいて良かつた。」

「なんか……最近このままでいいのかなって……」

「ん? どういうこと?」

「彩さんに守られっぱなしで……甘えっぱなしで……本当にこんなでいいのかなって……」

「うーん……全然そんなこと気にする必要無いと思うけどな。」

「え? どうしてですか?」

「いつも勉強頑張つてるけど、あれつていい大学行つていい企業に就職して私を贅沢させたいからなんでしょう?」

「ええっ!? いつ聞いてたんですか!」

「昨日だよ。実家で真冬くんがお父さんとそんな話してたのをたまたま聞いちやつてね……。キュンつてしまつた。」

「……／＼

「守られっぱなしでつて言つてるけどそんなこと無いと思うよ。さつきだつて体をはつて私のこと守ろうとしてくれたじやん。」

「でもあれは……結果的に彩さんに守られてたのであつて…」

「それだけじやないよ。」

「え？」

「無くなつた写真の分だけ楽しんじやえればいいつて。あれ言つてくれて私、すぐ嬉しかつたんだよ？」

「……」

「あといつもしつかりしてゐる真冬くんが私に甘えるの結構好きなんだけどなう。ギヤツプ萌えなのかな？」

「それは……」

「とにかく！ 真冬くんだつて頼れる彼氏なんだよ。お互ひ支えあつてこそカッフルだよ

！」

「……そうですね！ ありがとうございます！」

「うんうん。その笑顔こそ真冬くんつて感じだよ！ というかこの際不安なことを全部吐き出しちゃおうよ！ なんかあるかな？」

「あ、不安ではないんですけど一つ気になることが……」

「ん？」

「さつき男が数人僕を襲おうとしたところを彩さんが助けてくれたわけですが……以前にもこんなことがあつた気がしてならないんです。」

「…………え？」

「うーん……記憶がなくなる前の話なのかな……。」

「そんな……無理して思い出さなくとも……」

思考回路をフルスピードで巡らせてなんとか答えを出そうとする真冬。そしてその行動が予想だにしない結果を招いた。

「ぐうつ！」

「？」

「ああああ……あああアアアアア!!」

「えっ？ 真冬くん!? どうしたの!?」

「うあああああああああああああ!!」

突如真冬の脳内のテレビジョンに昔の記憶が次々に写し出されていった。小学校の校舎……そのときの友達……自分の母親……夕暮れの高架下……大勢の取り巻き……手を差しのべるピンク髪の女性……あまりにも目まぐるしく写出される情報が収まると同時に思いがけないことが起きた。

「ハア……ハア……」

「真冬くん……？落ち着いた……？」

「彩さん……。僕……」「？」

100 海で思いっきり遊ぶ感じです

「記憶を……取り戻しました。」

真実を知る感じです

大学病院の待合室にて…

「真冬くん、どうだつた？」

「幸いなことに異常は無いみたいですね。お医者さんもビックリしてましたよ。」

「そつか。そつちは安心したよ。」

「そつちは？どういうことですか？」

「ほら……記憶、全部取り戻したんでしょう？」

「は、はい……。」

「それで嫌なこととかトラウマも一緒に思い出しちゃったとかあつたら……真冬くん、大丈夫かなって…。」

先程の海水浴で思わぬハプニングが起きた。そう、真冬の記憶が全て戻つたのだ。ハプニングだつたため真冬も全てを受け入れることができたわけではない。今も戸惑つているのだ。

それに記憶が戻つたことは良いことだけではない。知らなくていいこと、例えばトラ

ウマなど。それらを一緒に思い出した影響を彩は心配しているのだ。

「トラウマですか……確かに一緒に思い出しちゃつてすこし怖いですよ。大勢の人に囲まれた時とかすごく怖いんです。」

「囲まれた……やつぱり……」

「ん? 何か言いましたか?」

「え? ううん何でもないよ!」

「そ、そうですか…。それで、怖いんですけど彩さんが一緒にいるとなぜか安心するんです。」

「私と……?」

「そうです。だから、僕は大丈夫です! だつて彩さんが一緒にいてくれるんだから! えへへ……」

「真冬くん……」

嬉しさと同時に困惑もあつた。笑顔で話す真冬だが、それとは裏腹に真冬の手が震えている。彩はそれを見逃さなかつた。

「真冬くん、
帰つたら真冬くんのお部屋にお邪魔していいかな?」

「え？ いいですけど……」

「よかつた。記憶が戻つたら話したかつたことがあつたの。真冬くんも気になることがあるでしょ？」

「え……やつぱり分かってるんですか？」

「うん。多分その話の真実を話したら……真冬くん、私のことを嫌いになっちゃうかも
しないけど……それでもいい？」

「そんな……そんなこと言わないでくださいよ……。」

二
せんねん

「とりあえず帰りましょうよ。僕も心の準備はできているので。」

「そつか。じやあ帰ろつか。真冬くん、立てる？」

「はい、お陰さまで立てるようになりました。」

「よかつたあ……。」

真冬の家にて：

「それで……真冬くん、私に聞きたいことあるでしょ？なんでもいいよ。」「それなら……一つ……」

「うん。」
「なんで彩さんは……」

僕の恋人でいるんですか?」

「うーん……やつぱりそこだよね……」

「僕は大勢の不良に襲われて意識を失い、気がつけば病院のベッドにいました。彩さんと初めて会つたのは病院です。僕は彩さんに告白した覚えもされた覚えもない。なのに……なんで僕の恋人を名乗っているんですか？」

「……今まで騙してたことがあるの……ごめんね。」

「いえ……僕は本当の事が知りたいだけなんです。それがたとえ騙されていたとしても……。彩さん、話してください。」

「そつか。じゃあ本当のこと話すね。」

「……お願いします。」

「真冬くんと初めて会つたのは病院じゃなくて……ある高架下なの。今から一年前の8月の事だった。夕方くらいだね。」

「……え？」

「真冬くんがある小さい男の子を大勢の不良からかばつて……その結果、真冬くんは気絶するまで殴られ続けた。」

「は、はい……そこまでは覚えています。」

「当時まだ高校生だった私はたまたまその現場の近くを通りかかつてね……通りかかつたときには既に真冬くんは倒れていたよ。」

「……」

「それでも殴り続けようとした不良達に私は何かがツンと切れて……その不良達を全員……ね。」

「えつ……彩さん……？」

「片付け終わつた後急いで真冬くんの意識を確認したんだけど反応がなかつたから私は救急車を呼んだよ。」

「そうだったんだ……それで僕が意識を取り戻して彩さんと病室で会つた…」

「そういうことだね。」

「それで……本題にはいるんだけど……なんで私が告白してもないのに真冬くんの彼女を名乗つてているのかつて話だよね。」

「ええ……」

「真冬くんと病室で会う前に、私は真冬くんのお父さんと会つてたの。」

「僕の父と…?」

「病院の待合室でね。真冬くんを助けたことでお礼を言われたよ。」

「……」

「ただ……話はそれだけじやなかつた。真冬くんは高校進学に合わせて真冬くんの実家がある愛知県からどうしても東京に出なきや行けなかつたんだよね? でも当時真冬くんのお父さんは仕事の事情で一緒に東京に行けなかつた。それでも真冬くんの体の事とか記憶の事とかを知つておきたい。」

「えっ、まさか彩さんは……」

「そこ」でたまたま私が大学進学で東京に行く事になつていたことを話したら真冬くんのお父さんは私に真冬くんの経過観察をお願いしたの。私はそれを請け負つた。真冬くんの彼女を名乗つていたのは真冬くんを側で見守ることができるようになつた。

「…………そんな……」

「私に幻滅しちやつた……かな。でもこれが、今までの真実だよ。嘘は一切無いよ。」

「…………最後に一つ、いいですか?」

「…………何かな?」

「僕のことが好きだつたつて言う気持ちは……嘘だつたんですか? 今まで彩さんと一緒にいたとき彩さんは……僕に嘘ついてたつてことですか!?」

「……言つても信じてもらえるか分からぬけど、真冬くんのことは今でも大好きだよ。その気持ちは絶対変わらない。」

「…………」

「そもそも真冬くんの経過観察のお願いを受けた理由はね……真冬くんに一目惚れしたからなの。」

「……えつ？」

「見ず知らずの子を体をはつて守つた……どんなに傷ついても守りきつた。そんな真冬くんの勇氣に私は思わず一目惚れしちやつた。」

「…」

「それだけじやないよ。真冬くんとふれあつてくうちに真冬くんの優しさとかかわいいところとか、いろんな良いところを見つけることができた。もう私は十分満足したよ。」

「彩さん……？」

「私はもうこのマンションを出ていくよ。真冬くんも、こんな秘密を抱えた女と一緒にいるのはイヤでしょ？だから……さようなら。」

口を笑わせ唇を噛み締めて彩はソファーアーを立つた。もう玄関に差し掛かるというところで彩の足は止まつた。真冬が背後から彩に抱きついて止めたのだつた。

「勝手に……いなくならないでくださいよ……。」

「…………真冬くん？」

「グツ……僕はね……ヒツ……安心したんですよ。今までの彩さんと作つてきた思い出は嘘じやなかつた……。どんな経緯があつてもこんな僕を好きでいてくれた……！」

「…………！」

「よかつたあ……嘘じやなかつだあ……。」

「…………」

「勝手にいなくならないでよお……！」

背後から涙ながらに訴える真冬に心打たれ彩も鼻先を赤くした。そして彩は方向を変えて真冬を胸いっぱいに抱きしめ、しばらくの間涙を流し続けた。

「うう……ううん……あれ? 僕: 寝ちゃつた……?」

「おはよう、真冬くん。今朝の5時くらいかな。」

「え? つてことは僕ずっと彩さんの胸で寝てた……? //

「もう今さら緊張することもないでしょ? だつて私達、恋人同士なんだから!」

「そうですが……それでもまだ恥ずかしいものは恥ずかしいですよ……。」

「そつか。今日は何しようか。またどこかデートしちゃう!? 何か楽しいことしようよ

!」

「……ですね!」

気づけば僕には生きる希望を持つた感じです

「おまたせ。行こつか！」

「はい！」

真冬が記憶を取り戻してから二週間目。この日はどこか宛もなくデートをするらしい。準備を終えて晴天の世界へと足を運び始めた。

「うーん……デートすると言つてもどこ行きましょか……。」

「そうだね……行きたいところありすぎて決められないんだよね……。今日は気ままに歩こつか。」

「そうですね。時間が経つたら行きたいところが見つかるかもしれないのです。」

「じゃあしゅっぱーつ！」

「ええ!? 走るんですか!？」

—————

二人がやつてきたのは駅前のパンケーキ屋。ここは以前二人が来ていたところでも

ある。いかにもメルヘンという色や装飾物で彩られているが真冬の心境は裏腹であつた。

「ううくん……つと。なんか最近伸びが癖になつてきたな。」

「ここ」ところいろいろな所にお出かけしてたから知らないうちに疲れが貯まつたんじやないですか？楽しいと疲れとかに鈍感になつちゃうので。」

「それもそうだね。ううくん。」

「つ！」

「ん？どうしたの？」

「あつ……いえいえ！何でもないですよ！」

「…？変な真冬くん……。大丈夫？具合悪い？」

「そ、そんなこと無いですよ！ほら！頼んでたパンケーキ來ましたよ！」

「…？そうだね…。」

真冬に異変を感じながらそのままナイフに手を伸ばす彩。同様に真冬も食べようとナイフに手を伸ばしたがそのままナイフに手が触れるることはなかつた。

「あ、あの～彩さん。」

「どうしたの？やつぱり具合悪い？」

「いえそうじやなくて……僕のパンケーキ切つてもらえますか？」

「？うんいいけど……」

「ありがとうございます……。」

「じゃ、じゃあ食べようか…。 いただきます！」

「い、 いただきます！」

銀色の光沢を放つナイフを自分で触ること無くパンケーキを口に運ぶ真冬はこの時
どんな味が広がっていたのだろうか。この時ばかりは彩も写真を撮ることに気が回ら
なかつたのであつた。

パンケーキ屋を出て二人は途方もなく商店街を歩いている。が、いつもと違い、真冬
が彩の手だけでなく服も握りしめている。そしてそのどちらとも震えている。

「真冬くん、一度静かなお店行こつか。この商店街に良いカフェがあるの。行つてもい
いかな？」

「ええ……。なんか今日は静かなところで落ち着きたい気分です。アハハ……。」

晴天が作り出す青いカーテンからの光を浴びた商店街を行くこと3分。目的地の羽沢珈琲店に到着した。その店が作り出す空間は外界とは一線を画しており、そとの賑やかさは遮断されているようだつた。

「つぐみちやーん！私の彼氏と一緒に来たよー！」

「彩さん恥ずかしいですよ……」

「ん？あっ、彩先輩！お久しぶりです！その人が前先輩が言つてた…彼氏さん？」

「うん、真冬くんだよ！あ、真冬くん。この子がつぐみちやん。私の後輩で優しい子だよ。」

「ど、どうも……真冬です。」

「真冬くんね、はじめてまして！」

「……っ！」

「あれ？彩先輩、私嫌われちゃいました？」

「え？ううんそんなこと無いと思うよ！だつ、だよね真冬くん…？」

「……」

「真冬くん……？」

「つーーごめんなさい！全然嫌いになんてなつていませんよ！よろしくお願ひします！つぐみさん！」

「う、うんよろしくね…。席はこちらにどうぞ！あ、そうだ。最近カツプルドリンク始めたんですけどよかつたらどうですか？」

「え？ カツプルドリンク!? 真冬くん飲もうよ！ 一回やつてみたかつたの！」

「は、恥ずかしいですよ……／＼」

「一緒に写真撮つてくれるだけでいいの！ お願ひ……」

「……分かりました。一瞬だけですよ？」

「やつたー！ 真冬くん真冬くん！」

「ちよつと彩さん…目の前につぐみさんがいるんですよ…？」

「あつ。ごめんつぐみちゃん！なりふり構わずに…。」

「あはは……ではごゆつくり……／＼」

火照った心をすこし冷ましてから案内された席に着く二人。

「…………」

「真冬くん。話なら聞くよ?」

「……」

「真冬くん?今は話にくい?」

「…………怖いんです。」

「怖い……?」

「記憶を取り戻してから今日まで…………思い出さない方が良かつたトラウマが…………いろいろと湧いて出てくるんです。」

「つ……」

「でもこれを彩さんに話したら……今度は彩さんまで潰れちゃうかもしね。襲撃にあつたあの日、ナイフや鉄パイプを向けられてそれがトラウマで…………思い出さない方が良かつた……。」

「真冬くん……。」

「彩さんはそんなトラウマを思い出させないために色々根回ししてくれてたんですねよね?それなのに僕、彩さんの気遣いを台無しにしちゃつて……。自分が嫌になりました……。」

「…………そうだつたんだね。」

「話がまとまつてないですね……。もう……どうしたら……。」

「あのね真冬くん。」

「？」

「私が騙したとはいえ真冬くんは私のことを恋人だつて認めてくれたんだよ？そういう話しさはどんどんしてほしいな。」

「ごめんなさい……。」

「え？」

「もう僕は……誰かに頼る自分が……守られる自分が嫌なんです！そんなみつともない自分が大嫌いなんです!!」

「あっ！真冬くん！」

二人だけの店内に真冬の傷みが響きわたる。真冬は目に涙を浮かべながら彩に千円を預けて店を飛び出していった。焦りと放心が彩の脳内を駆け巡った。
しばらくすると彩は決意を固めた。

(なんと言われようと……真冬くんを一人にはさせない！)

「つぐみちやーん！ お金おいておくね！ お釣り入らないよ！ また来るね！」

「え？ えーっと……あ、ありがとうございましたー！」

「うーん……どう真冬くん……。もつと遠くなのかな……。」

まだ青いカーテンが空を包む頃、彩は商店街を歩き回り真冬を探していた。聞き込みやsnsの呟きのチェックなどひたすらにこなしていくがどれも当たりは無く、時間だけが無情に過ぎていった。

真冬を探し始めて一時間が経過した頃だった。二十代前半の男のグループが彩を尋ねた。

「すいませーん。」

「え? 私ですか?」

「はい。実はこの子を探しているんですが……何か心当たりはありますか?」

「え?」

男が見せた写真は見間違はずもない、彩の彼氏、真冬の写真だった。

「実は私も探してるんです。その子、私の恋人で……。」

彩のその返答で男達は何かを確信したかのようにニヤリと口角を上げ、高らかに笑い始めた。

彩が困惑していると彩の後頭部に激痛が走った。

「はあ……僕、彩さんになんてことを……。ますます自分が嫌になる……。」

一方真冬は商店街から遠くはなれたとある公園のベンチで一人うつむいていた。記憶を取り戻してからというもの、自責の念にかられて自暴自棄になる真冬。結局今回も彩の手を煩わせてしまつたと後悔しているのだ。

そんな真冬に一本の電話が入つた。真冬にとつては知らない電話番号だった。

「あれ? 何この電話番号? もしもし?」

「高部? 真冬だな?」

「? だつたらなんですか?」

「その前にまず俺が誰か分かるか?」

知らない電話番号に知らない男の声。真冬の脳内は疑問符で埋め尽くされていたがそれがこの後すぐに焦りへと変わる。

「覚えてるか？俺は去年の夏にてめえを襲撃したチームのリーダーってところだ。」

「……！なんで……なんで僕の電話番号が分かつた！？」

「そりや不思議に思うよな！それもそのはずだ。あの時俺らを邪魔してくれたピンク髪の女を人質にとつているんだからなあ！」

「……え？ 彩さんを……！」

「俺らは日の丸運輸つて潰れた会社の廃倉庫にいる。助けに来たかつたらこいよ。お一つと警察呼ぶのは無しだぜ！警官が一人でも見えたならその瞬間この女殺すからな！」

「そんなことして何になるんだ！今すぐ彩さんを解放しろ！」

「まあ焦んなよ。てめえが一人で来ればいい話なんだからな。じゃ、待つてるぜ。ハハハ……！」

「……また僕のせいで彩さんが……。なんで僕は……」

一人焦りが止まらない。結局自分が足手まといになってしまった。そう感じる真冬

に走馬灯の如く今までの彩との思い出が甦つてくる。

（辛かつたら私がいるよ。いつでも抱きしめてあげるからね。）

「違う……こんなことしてる場合じやない！今度は僕が彩さんを助けるんだ！」

おぼつかない手でスマホのマップを開き、真冬は彩が待つ倉庫へと向かつた。

廃倉庫にて…

「もう離してよ！こんなことして何になるの！」

「うるせーよ……一年前、俺らをボツコボコにしてくれたよなあ!?」

「その復讐ってこと？一年前も今も一人相手に大勢でかかつてきて……呆れちゃうよ。」

「なんだと……」のヤロウ！

「つ！」

彩の顔面すれすれで男が振った鉄パイプが止まつた。どうやら彩に恐怖を植え付け

たいのだろう。しかし……

「私はそんな脅しには屈しないよ。どんなに殴られてもね。でも……」「…………あ？」

「真冬くんに手を出したら……容赦はしないよ。」

恐怖どころか怒りが彩を支配する。男達が若干後ずさりするがリーダーらしき男が言葉を怒り混じりに紡いでいく。

「身動きもとれねえ状態で何いつてんだよ…………てめえ死にてえのか!?」「…………（これで良かつたんだよね。真冬くん、バイバイ。）」

だがもう死を覚悟している彩はもはや諦めていた。

だが諦めの気持ちだけでなく、真冬を巻き込まないで済んだという安堵の気持ちで口角が若干ながら上がった。

「よーし、じゃあもうやつちまうぞ。お前ら！俺が先陣切つたら後に続けよ！」

「へい！」

リーダーが鉄パイプを振り上げた

その時だつた。

「ちょっと待つた——————!!」

「あ？ つてなんだよアレ!?」

「どけどけどけ——————!!」

「おいやべえ轢かれるぞ！ ウワアアアツ！」

「えつ！ 真冬くん！」

「デスソース入り水鉄砲をくらえ～～!!」

「ギヤアアアア!!」

「目がああああ!!」

真冬が廃倉庫の脇においてあつた巨大フオークリフトに乗つて彩のもとへ登場。集団で突撃した直後、真冬が男達の目と口を正確に射撃していき、気づけば彩を取り囲んでいた全員がその場に倒れた。

「はあ……はあ……緊張した…。」

「真冬くん……助けにきてくれたの？」

「はい…。一年前、彩さんは僕を助けてくれた…。だから今度は僕の番だつたんです

！」

「真冬くん……。かつこよかつたよ。」

「良かつた……。彩さんが無事…で……」

「えつ？ 真冬くん！？ 真冬くん！」

「すう…すう…」

「寝ちゃつた。大好きだよ。」

「すう…」

「帰ろつか。」

彩は真冬を背負つて歩き出した。もう外は日が落ち始めてオレンジ色の光が二人に
降り注いだ。

「んあ……あれ？ここは？」

「真冬くんの家だよ。」

「え……てことは僕……」

「私の背中でぐっすり寝てたよ。気持ち良さそうにね。」

「えっ!? ジつ、ジジジジめんなさい！ ／／／」

「謝ること無いんだよ？ それに……」

「それに？」

「助けてくれてありがとう。真冬くん……ヒーローだよ。」

「えへへ……初めてそんなこと言われた……。」

「かつこよかつたよ。」

「ありがとうございます。何だか…恥ずかしい…／＼

「そつか。真冬くんらしいなあ…」

「それと……カフエであんなこと言つてしまつて……本当にごめんなさい。僕…自暴自棄になつてて……」

「ううん、いいんだよ。」

「それに……まだまだトラウマが乗り越えられそうになくて……」

「真冬くん。」

「はい。」

「一緒に乗り越えようよ！」

「……は、
はい！」

気づけば僕には年上の彼女がいた

E
N
D